

万葉集の「そがひ」に関する若干の考察

藤田 富士夫

I. はじめに

万葉集の解釈において未だ定説をみない語句の一つに「そがひ」がある。集中に12例を数え、曾我比（6例）、背向（3例）、背（2例）、背ヒ（1例）の4つの表記法がある。語義について溝上貴信のまとめを記しておきたい。「そがひ」は単独語形では表れず、「そがひに」という副詞形をとり、下接する動詞も①「見ゆる」、②「見つつ」、③「寝しく」の3つに限られている。そして、①「そがひに見ゆる」は、「後ろに見える」「後方にある」と解釈するが、その後方には多少の幅があつて厳密に真後ろというのではなく、「斜め後ろ」ぐらいまで含む。②「そがひに見つつ」は、「後ろに見ながら」とか、「後にして」ぐらいの意。③「そがひに寝しく」は、「背中を向けて寝た」、「背中合わせに寝る」とする。⁽¹⁾

一方、山崎良幸は、『「うしろ」または「背後」の意を表わすものと解しなければならない必然性は、遂に見出しがたい…（筆者略）…それどころか、そう解したのでは、歌意がかえって不自然にすらなるはずである。「そがひ」の「そ」は、むしろ「そく」や「そき」「そきへ」等における「そ」と意味的関連をもつとして、これを「遙か彼方」の意を表すものとするならば、すべての用例にわたって合理的な説明が可能になる』とする。⁽²⁾

また、小野寛は作者と歌詞との位置関係から、「そがひ」は、「遠く離れゆくイメージ」「離れ離れに寝る」「葦穂山が筑波山からある距離を隔てている」「空の彼方へ離れ遠ざかりゆくイメージ」と説いている。⁽³⁾ 別稿の「そがひに見ゆる」の文では、『「背がひに」が後ろの意味ではないのである。「背がひ」の「背」はそむく意で、離反し、離れ去る意である。「背がひに見つつ」とは後ろに見ながら、どんどん離れて行くのである。「背がひに見ゆる」は遠くに離れて見えることだ』とする。⁽⁴⁾

小野説に疑問を呈する吉井巖は、『漢書』芸文誌に「背向」を見だし、それが本来でソガヒはその翻訳語として生まれたとする。そして『「前後」の意、或いは「向ったり背にしたりする」意の語として用いられた』とする。⁽⁵⁾

本稿ではこのような諸論に学びつつ、実地的視点から「そがひ」を考えて見たい。これまでの研究で、国文学的な検討が先行していて、いわゆる地域学的な視点が弱いと感ずることがある。少なくとも重要な論点については実地を踏むことが不可欠である。⁽⁶⁾ かかる視点からの試みを行う。ただ、ここでは12例の「そがひ」全てを論じる余裕はないので、

さしあたって「筑波嶺に」(巻14・3391)、「さき竹の」(巻7・1412)、「山菅の」(巻14・3577)の3首についてのみ論じたい。

Ⅱ. 筑波嶺にそがひに見ゆる葦穂山

(1) 歌作者の“立ち位置”

○筑波嶺に そがひに見ゆる 葦穂山 悪しかるとがも さね見えなくに (巻14・3391)

【筑波祢尔 曾我比尔美由流 安之保夜麻 安志可流登我毛 左祢見延奈久尔】

この歌は、「筑波嶺に」、「葦穂山」が「そがひに見ゆる」関係を示している。かかる「そがひ」について、契沖『萬葉代匠記』以来、様々な論が行われてきた。⁽⁷⁾ そのあらまは渡部和雄の論考に詳しいので参照いただくこととして、⁽⁸⁾ ここでは近年の主な研究を概観しておきたい。論点の一つに歌作者の“立ち位置”がある。

①歌作者は筑波山の正面(南側)に立っている。
窪田空穂は、初句を「筑波根に」とみる。「背向に見ゆる」は、筑波山のある「南を表とし、北を背として云ってあるのである」とし、口語訳を「筑波根の背面に見える葦穂山。その悪しくあると思ふ缺點も、眞に見えないことであるよ」とする。⁽⁹⁾

新日本文学大系は、「筑波山の反対側に見える葦穂山、そのあしき点はちっとも見えはしないのに」とする。「筑波山の反対側」とあるのは、窪田と同じく筑波山南面を表とみる理解に立つ。⁽¹⁰⁾

②歌作者は筑波山頂に立っている。

馬田義雄は「筑波祢尔」を「筑波山において」とし、そのことから「晴れた日にして筑波山頂から見られるあしほ山なのである」と立ち位置を論じ、『「そがひにみゆる」もまた「後方に見える」と解して些かも不都合はない』とする。⁽¹¹⁾

新潮日本古典集成は、「筑波嶺から振り向けば見える葦穂山、その名のように、悪しと思われるところなど、あの娘にはちっともありはしないのに」とする。⁽¹²⁾

③歌作者は筑波山と葦穂山とを離れた別の場所に立って見ている。

土屋文明は、「筑波山に對して、後方に離れて見える葦穂山の如く、あしくある缺點も、まことに見えなくあるよ」とする。⁽¹³⁾

新編日本古典文学全集は、「筑波嶺から後ろに見える葦穂山、あしというほどのあらも ぜんぜん見えないあの人」とし、頭注に「ソ(背)+カヒ(方向)の意」、「作者は筑波山の西南方向から眺めているのであろう」とする。⁽¹⁴⁾

小野寛は、「筑波嶺に」の「に」に注目する。山部赤人の「繩の浦ゆ」(巻3・357)、「雑賀野ゆ」(巻6・917)を検討し、「ゆ」は、赤人自身がそこに立っているとする。これに對して「に」は、そこに作者は立っていないと論じ、「この作者は更に別の地にあつて、「筑

波嶺」と「葦穂山」とを見ている」、「葦穂山が筑波山からある距離を隔てていることを表現したもの」とする。⁽¹⁵⁾

以上、手元にある図書から適宜紹介した。「そがひ」の理解の仕方によって、その“立ち位置”が三大別できる。難語とされてきた由縁である。

(2) 筑波山から「そがひに」見ゆる足尾山

「筑波嶺にそがひに見ゆる葦穂山」の筑波嶺は筑波山に、葦穂山は足尾山に比定されている。これには異説が無く、ほぼ定説となっている。

筑波山(写真1)は茨城県つくば市・桜川市・石岡市にまたがって所在し、奈良時代撰進の『常陸国風土記』にも記された神体山である。東峰に男体山(標高871m)、西峰に女体山(877m)を有する二峰を成す。南麓に神体山を祀る筑波山神社が鎮座している。その立地は南面思想に則っていよう。窪田空穂が筑波山の南面を「表」とし、その後側を「背」としているのは、常識的な解釈である。

筑波山の北東約7.3kmに足尾山(標高627.5m)がある。目立つ山ではないのに葦穂山と訓を同じくする。「葦穂山」はこの山に比定されている。

足尾山の北約1.3kmには三角形を呈する丸山(標高576m)、さらにその北約1kmには加波山(標高709m)がある。筑波山と加波山の間、約9kmにわたって筑波山系が展開する。

筆者は万葉歌を理解する手法として、難語「そがひ」をひとまず(括弧)で括ってから考えてみることにする。すると「筑波嶺に(そがひに)見ゆる葦穂山」となる。根幹は、「筑波嶺に見ゆる葦穂山」なのである。見えることが前提となる。

このように仮定すると前掲の「①説」が説く、筑波山の「反対側に見える」や「背面に見える」は成立しない。筑波山の正面から足尾山は見えない。⁽¹⁶⁾

加えて小野寛の、「筑波嶺に」の「に」用法に従えば「②説」が説く、“歌作者は筑波山の山頂に立っている”も成立しない。このことは実地に筑波山頂(男体山)から見下ろして見ると明確となる。たしかに足尾山は望見できる(写真2)。しかし加波山や吾国山(標高518.2m)が目立っていて、足尾山は事前の知識がないと判別できない。この“立ち位置”からは足尾山を詠む動機を感じることは出来ない。

「③説」は、「作者は筑波山の西南方向から眺めているのであろう」とする。「筑波嶺から後ろに見える」と口語訳されている。「そがひ」を「後ろ」と解釈する。ただし、その具体的“立ち位置”には触れられていない。両山が共に見える場所といったことから呈されたのであろう。この説では、一体どのような景観が具現するであろうか。

筆者は三度現地に立った。あるとき、筑波山と足尾山、両山が俯瞰できる(つくば市)中根地区に立って見た(写真3)。男体山を南西から真横に見る場所である。そこでも筑

波山は二峰を成していた。通常見慣れている南側（一般的正面観）の姿形とは異なりコンパクトな二峰の山容が展開していた。右側（男体山・標高 871 m）が高く左側（男体山北東に派生したピークで標高 710 m）が低い。両山頂の間は凹形を成している。それを見た途端、仰向けになった人物のイメージと重なった。右頂に頭を、凹部に腹部を、左頂に腿を立てた寝姿が見えた（写真 4）。ここで渡部和雄による「筑波嶺」の歌は、「ネ・寝」の文学であるとする主張を想起した。万葉歌人にとって「筑波嶺」とは「筑波寝」であったとする説である。⁽¹⁷⁾ このような筆者の感じ方は渡部論考から来る幻影かもしれない。けれども、もし万葉人が山容に「筑波寝」を見たとしたら、きっとこのような姿態であっただろう。そこから筑波山に対して斜め後方に足尾山が見える。驚いたことに、足尾山も同じ形で横たわっていた。両者の姿形は同じであった。

相似形によって筑波山と足尾山とは関係づけられていた。筑波嶺（寝）の姿形に対して足尾山の姿形が「悪しかるとがも さね見えなくに」といった評価が成されていたのである。万葉人は山容の相似に気づき、葦穂山は凡庸ではあるが中々のものと感じ入ったのであろう。「葦穂山」の名が先行していたか、それとも万葉人の創案であったかは分からないが、その気づきは当時の人々に共有されたものであったに違いない。かかる姿形の相似によって足尾山は一目置かれたのであろう。

このような景観を踏まえて筑波嶺と葦穂山の関係を見る。歌詞は、「筑波嶺」の「そがひに見ゆる」のが「葦穂山」とする。「そがひに見ゆる」の実景がここに展開している。歌作者から見て手前に筑波嶺があり、「そがひに」葦穂山が「見ゆる」のである。現地に立ってみると、筑波山と足尾山とは「斜めに向かい合う」、あるいは「斜め後ろ」になって見える。この関係性が「そがひ」であると思われる。⁽¹⁸⁾ ここにおいて「③説」が説く「作者は筑波山の西南方向から眺めているのであろう」が具体化する。かかる相似形を 1 枚の写真で示そうとしたが素人では足尾山を上手く写し込むことが出来ない。肉眼では、もちろん鮮明に認識できる。足尾山の姿形を示すには近接するしかない。中根地区から見える足尾山と同角度となる中村地区から写真を撮った（写真 5）。

（3）「筑波嶺に」の歌作環境と遺跡

前節で、「筑波嶺に そがひに見ゆる 葦穂山」の具体を見た。それは、〈つくば市〉中根での気づきであった。これをヒントにさらに観察を深めて見た。というのは、中根地区に奈良時代の主要遺跡は知られていないからである。問題の歌は、筑波山と足尾山とを「筑波寝」で関連づけている。「筑波寝」は、当時の人々共通の認識であったに違いない。

歌作者の“立ち位置”はどこにあるのだろうか。主要遺跡の分布に手掛かりを求めたい。歌作は集落遺跡を中心とした生活圏で成されたであろう。今日、風光明媚であったとしても、奈良時代には人跡乏しかったというのでは候補地とは出来ない。

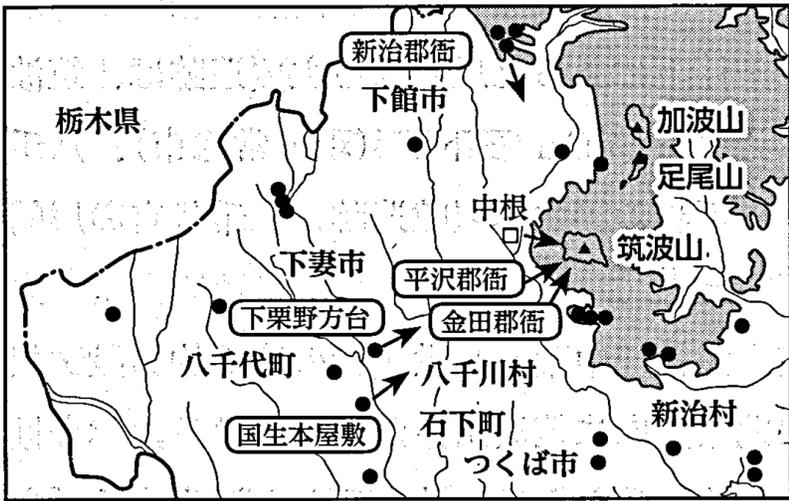
立ち位置は、筑波山の南西域にあって、足尾山が「そがひに見え」、かつ両者が相似の「筑波寝」を示す場所に求められよう。このような条件下にあると思われる主要遺跡は、筑波山の南西約15～16kmに位置する千代川村（現・下妻市）、石下町（現・常総市）、八千代町に集中する。千代川村の下栗野方台遺跡、石下町の国生本屋敷遺跡、八千代町の尾崎前山遺跡、水海道市の大生郷遺跡などがそれである。⁽¹⁹⁾

国生本屋敷遺跡は、古墳時代前期の豪族巨館、7世紀中葉～8世紀代の官衙的施設・集落、平安時代前期集落に顕著さを示す。遺跡の北東方向に筑波山系が望見できる。律令期の官衙的建物遺構の検出は魅力的である。しかし、ここからは筑波山系から派生する「きのこ山」（標高527.9m）が前面に位置し足尾山は見えない（写真6）。⁽²⁰⁾

また、大生郷遺跡から足尾山は、筑波山の背後になって見えず、かつ9世紀前半の遺跡なので検討外となる。尾崎前山遺跡は製鉄を伴う集落遺跡である。奈良・平安時代遺跡ではあるが詳細時期が不明なため、ここでの検討に耐えない。

このような中で下栗野方台遺跡は注目される。⁽²¹⁾ 約20,000㎡に及ぶ大遺跡で、これまで13,750㎡が発掘されている。古墳時代から中世にかけての竪穴住居跡304軒、掘立柱建物跡10棟、土抗24基、井戸遺構4基などが発掘されている。全6期に大別される。⁽²²⁾ 「1期」は8世紀前半で、2軒の竪穴住居跡がある。「2期」は8世紀中ごろで、6軒の竪穴住居跡があり、「大山」刻書の須恵器坏が出土している。筑波山を指したものであろうか、あるいは人名であろうか。いずれにしろ「山」に関わる人々がいた傍証となろう。「3期」は8世紀後半で、3軒の竪穴住居跡と1基の竪穴遺構が検出されている。万葉収載歌の最終歌は天平宝字3年（759）とされているので、ここでは「1期」と「2期」が対象となろう。「2期」において、文字を認識する住人がいた事実は重要である。この遺跡は、〈中根〉と足尾山とを結んだほぼ線上に位置する（第1図）。遺跡から見た筑波山と足尾山は「そがひ」の位置関係を示している（写真7）。可能性の問題ではあるが、本遺跡は「筑波嶺の」歌作環境にふさわしいといっていよう。

なお、諸説には新治郡衙遺跡から望見したとするものがある。ここからは右に筑波山が、左に加波山が見える（写真8）。筑波山と足尾山は同一の視野にあるものの、両山が「そがひ」で説明されるべき特別な光景を呈していない。しかも足尾山は凡庸な山容として風景の中に埋没している。この“立ち位置”からは、足尾山が詠まれた動機が説明できない。周辺の官衙遺跡では、ほかに金田官衙遺跡と半沢官衙遺跡とが知られている。共に筑波山の南半部に位置し足尾山は見えない（写真9、10）。これらの官衙遺跡は、ここでの検討対象とはならない。また、筑波山と足尾山との「そがひ」関係は、常総市の国生本屋敷遺跡では成立せず、下妻市の下栗野方台遺跡では成立する。この間に分岐域のあることが分かる。下栗野方台遺跡とその周辺が歌作条件に沿っているものと思われる。



第1図 奈良・平安時代の主な遺跡
(筑波山と遺跡分布図一図中の矢印は写真3～10の撮影方向)

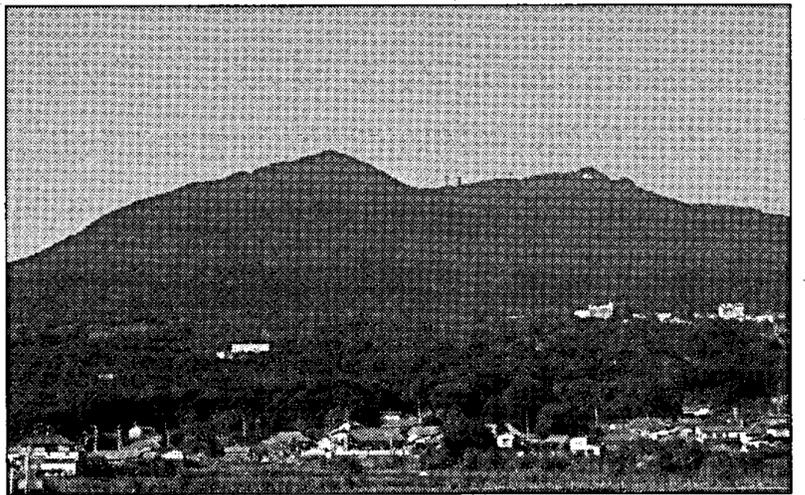


写真1 筑波山の全景 (南から)

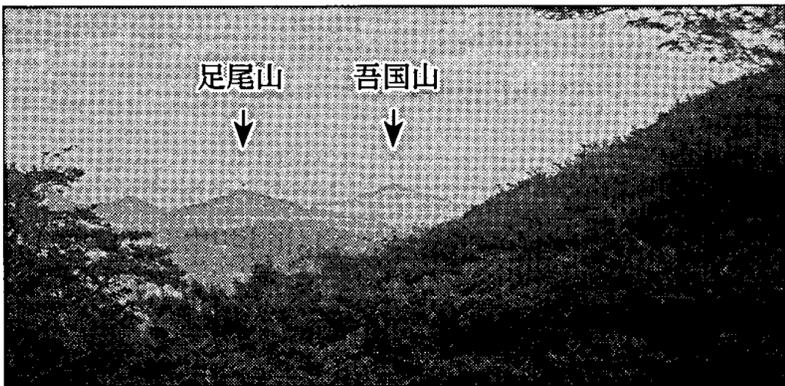


写真2 筑波山頂から見た足尾山

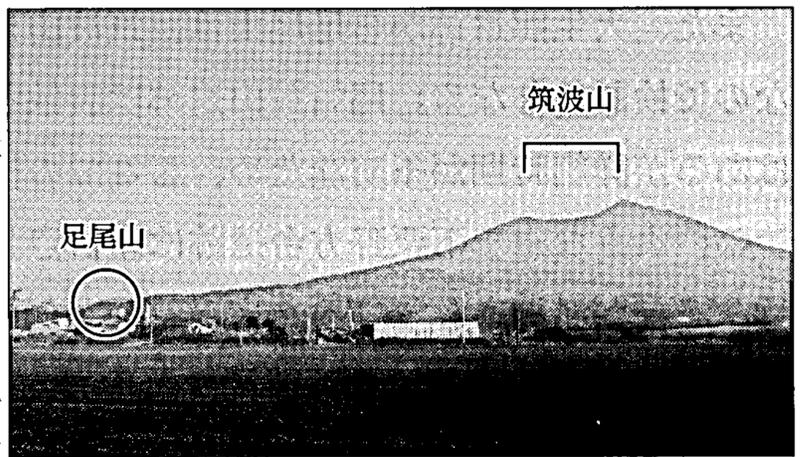


写真3 筑波山系の全景 (南西から)



写真4 男体山と足尾山に見る「筑波寝」

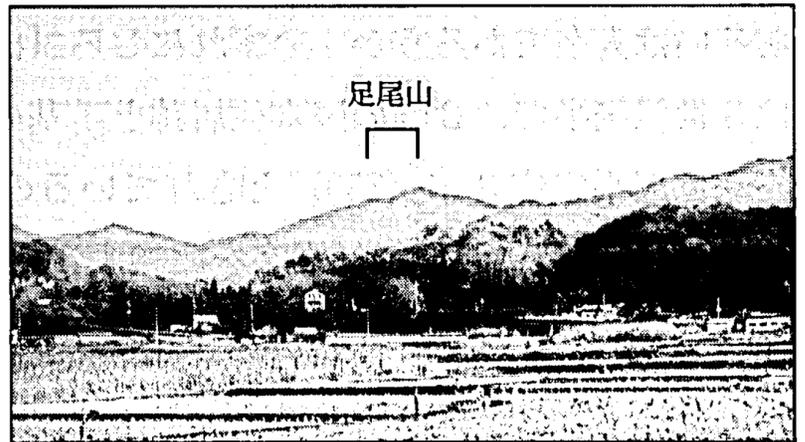


写真5 足尾山の近景 (つくば市中村から)



写真6 国生本屋敷遺跡から見た筑波山系
(足尾山は見えない) - 註20文献から引用 -

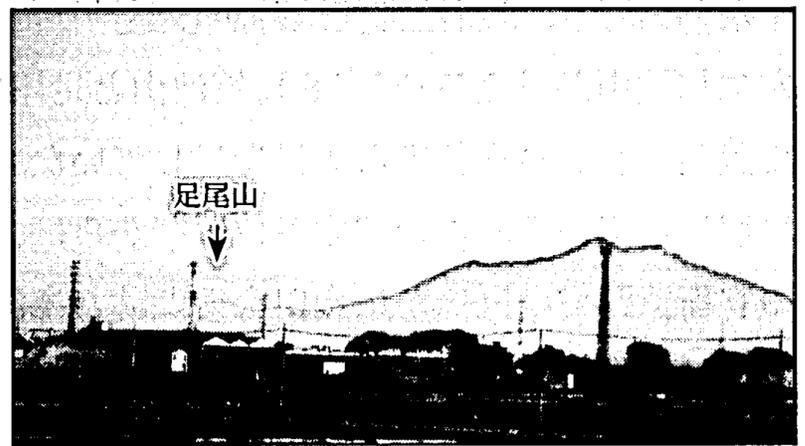


写真7 下栗野方台遺跡から見た筑波山と
足尾山

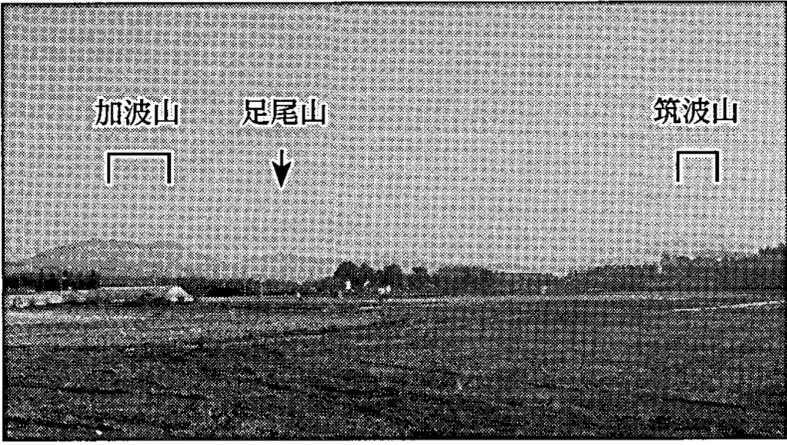


写真8 新治郡衙遺跡から見た筑波山と
足尾山・加波山



写真9 金田郡衙遺跡から見た筑波山

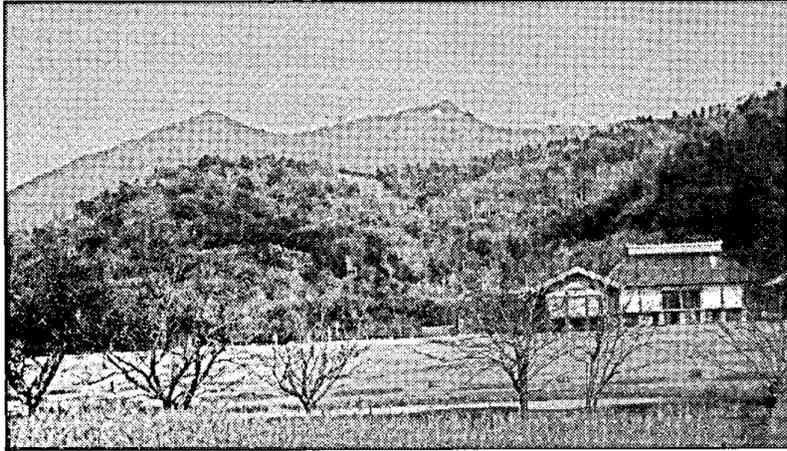


写真10 半沢郡衙遺跡から見た筑波山

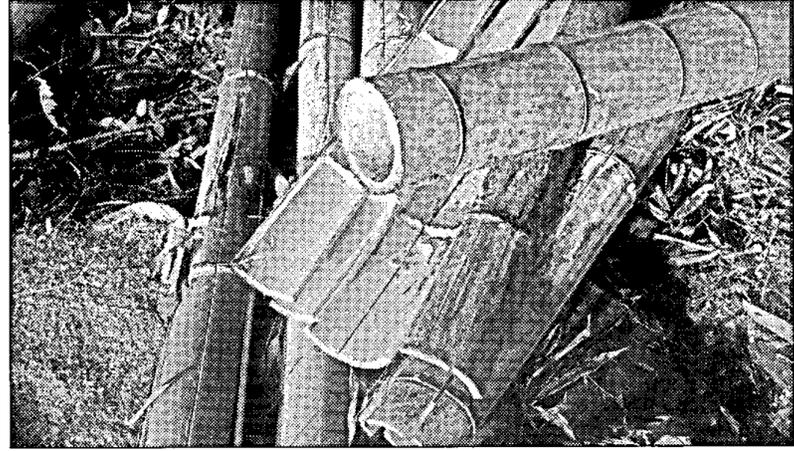


写真11 「劈き竹」の様子

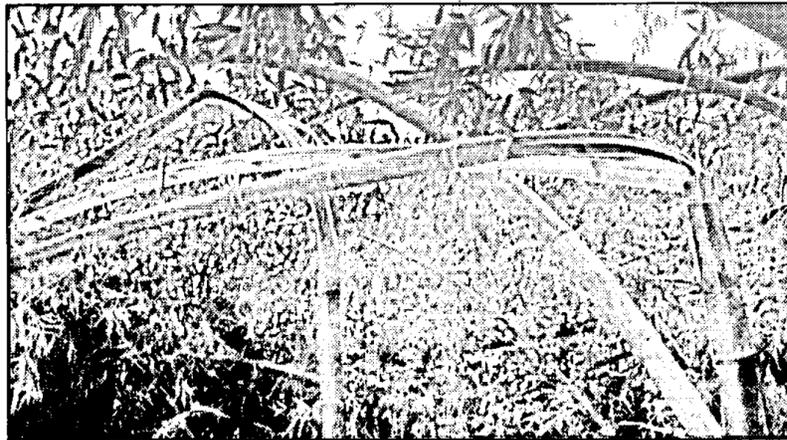


写真12 真竹の「劈き竹」の様子

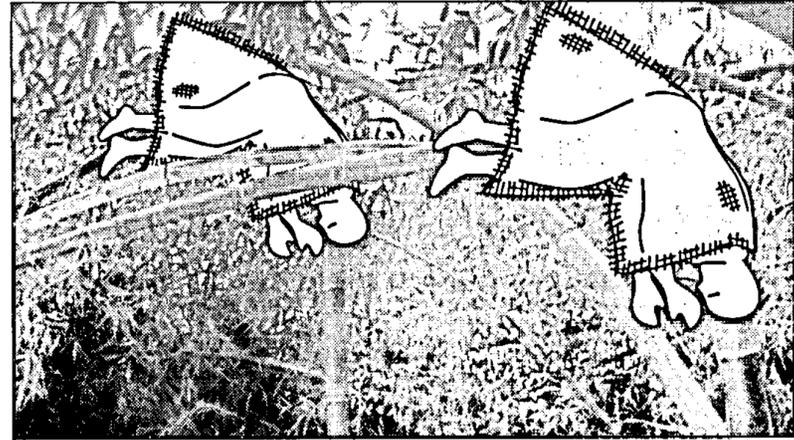


写真13 劈き竹のそがひに寝しく



写真14 植えられた直後の菅の様子

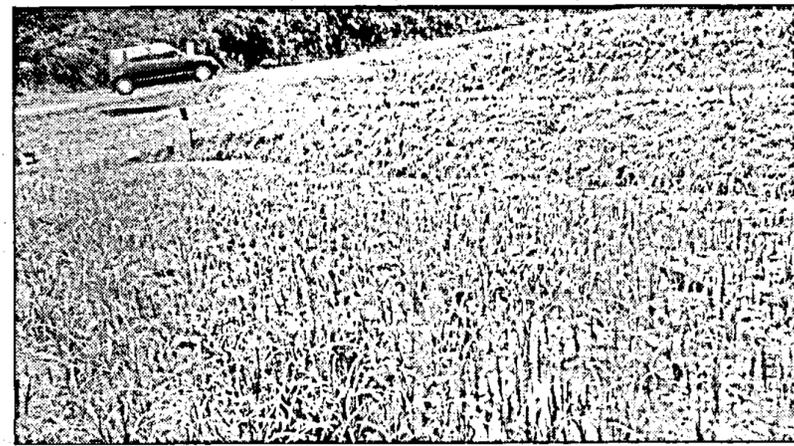


写真15 新芽が出ている菅田

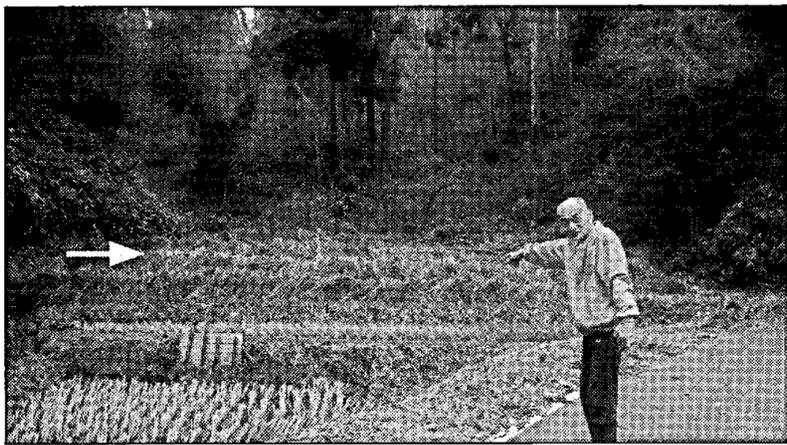


写真16 放置された菅田
(案内者は宮崎隆氏)

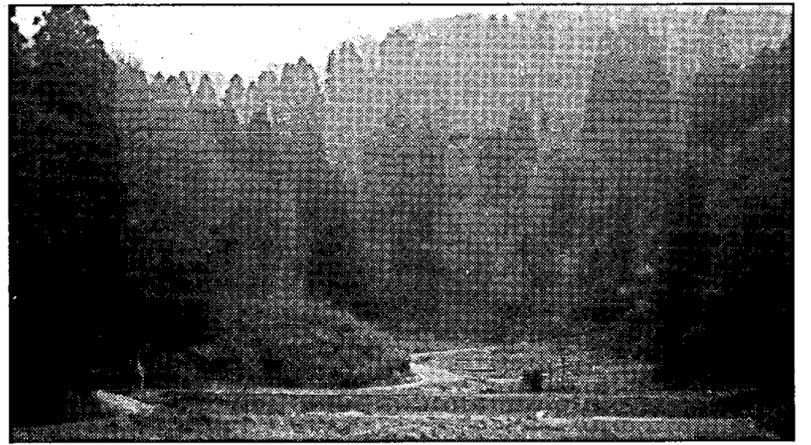


写真17 谷奥に菅田が営まれている
(上向田地区)



写真18 一定の方向にかたまって倒れる菅



写真19 山菅のそがひに寝しく

Ⅲ. 「さき竹」と「山菅」のそがひ

「そがい(ひ)」を辞書で引くと「①後ろ向き。背中合わせ。」とある。⁽²³⁾「背中合わせ」は、「さき竹の」(巻7・1412)と「山菅の」(巻14・3577)の2首から導かれた解釈である。実は、この2首は類歌としてあるので、実態はただ1例ということになる。集中「そがひ」12例のうち、これだけが他と異なる解釈がなされている。はたして「背中合わせ」は成立するのであろうか。

(1) 「さき竹の」のそがひ

○我が背子を いづち行かめと さき竹の そがひに寝しく 今し悔しも (巻7・1412)
【吾背子乎 何処行目跡 辟竹之 背向尔宿之久 今思悔裳】

挽歌にあるもので「わが夫が どこへ行くものかと (さき竹の) 背中を向けて寝たことが 今では残念だ」と口語訳されている。⁽²⁴⁾

ア. 枕詞「辟竹之」をめぐる

口語訳で(さき竹の)と括弧に入れられているように、それは枕詞としてある。古橋信孝によれば枕詞は意味としての役割はもっていないが、歌にとって本質的なもの。ゆえに枕詞を明らかにすることは歌そのものの質を明らかにすることでもあるとされる。⁽²⁵⁾ かが

る示唆を受けて、ここでは枕詞「さき竹の」検討を行いたい。

枕詞「さき竹の（辟竹之）」の注釈について、手元にある啓蒙書を開いてみた。

①「さき竹の一ツガヒの枕詞。割った竹が皮どうし背中合わせになる意でかけた」⁽²⁶⁾

②「さき竹の一枕詞。割りさいた竹を背中合わせにするところから、「背向」に接続」⁽²⁷⁾

③「辟竹之 サキタケノ。枕詞。サキタケは、割った竹で、これを同じ向きに重ねると「背向」腹と背とが接するので、背向に冠するのであろう」⁽²⁸⁾

④「さき竹は割たる竹をいふ」⁽²⁹⁾

⑤「「さき竹」は、裂いた竹で、竹を事に使用するに先だってすること。裂いた竹を積み重ねた状態から、背向にかかるのか。枕詞。「背向」は、背中合わせ」⁽³⁰⁾

一般に、「さき竹」は「割った竹・割りさいた竹・割たる竹」と解されている。唯一、窪田空穂が「裂いた竹」としているが、訳文では割った竹と同じ意味で用いている。「一度割られた竹は、再びもとのすがたに返しようがない」ことから、古代人は離れ離れになっているさまを「さき竹」から感じ取ったとする解説もある。⁽³¹⁾より具体的に「割った竹」を図示した解説もある。⁽³²⁾

筆者は、この歌を理解する手法として、難語「そがひ」をひとまず（括弧）で括ってから考えてみることにする。すると「さき竹の（そがひに）寝しく」となる。根幹は「さき竹の」「寝しく」なのである。「寝しく」とは「寝ク」のク語法である。回想の助動詞キのク語法はシクとなる。⁽³³⁾ここは、さき竹が「寝る」とできる。寝るは、「眠りにつく、共寝をする」などを表す言葉であるが、一方で「本来立っているもの、縦のものが横になる」ことを言う。⁽³⁴⁾

筆者の家は竹林に隣接する。「竹が寝た」とか「竹が寝る」というのは日常語である。竹がしな撓うことや倒れることである。この歌は、“竹が寝ている”ことを示していよう。

次に、「さき竹」について検討したい。原文には「辟竹之」とある。読みには「きみ。ひらく。めす」があり、字義には「つみ、あきらかにする。ひらく。あける。さく。ひきさく」などがある。解字は意符の（つみの意）と、音符のへキ（屈服する意）とから成る。⁽³⁵⁾

字解の解説は日頃無縁の者にとって難解だが、辟の声系（辟声）を見るとその原義がいくらか見えてくる。「劈」の解字は意符の刀（かたな）と音符の辟（ひらく意）とから成る。「襞」の解字は、意符の衣（ころも）と音符の辟（曲げて折る意）とから成る。「避」の解字は意符の辵（みち）と音符の辟（かたよる、展開する意）とから成る。ほかには壁、癖、僻などがある。⁽³⁶⁾諸橋『大漢和辞典』では、辟は「なかばにする・さく（劈）」に通ずとある。ほかにも「かべ（壁）」、「とちる（襞）」、「あしなへ（躄）」、「さける（僻）」、「ひらく（關）」、「さける（避）」などに〈通ず〉とあるが、本稿での字義にふさわしいのは「劈」であろう。⁽³⁷⁾一方、「割」の読みには「さく、わる、われる、わり」があり、字義には「わる、さく、きりわける、

たつ、たちきる、きりとる」などがある。解字は意符の刀と、音符の害（動物を解剖して各部分をばらばらにする意＝解剖。一説に、切断する意）とから成る。刀で解剖してばらばらにする意がある。⁽³⁸⁾

説明が煩雑となったが、「辟」には「ひきさく」や「あける」、「曲げて折る」が含意され、「割」には「われる」や「きりとる」、「ばらばらにする」が含意されている。「辟」と「割」は原義が異なる。先に紹介した①～④の説は、原文の「辟竹之」を「割竹之」と、置き換えて読解している。何故、置き換えなくてはならないのか、このことについて触れた論考を筆者は管見にして知らない。諸橋『大漢和辞典』でも、「辟」は「劈」に〈通じ〉とあるが、「割」は「辟声」自体に出てこない。

国文学では、契沖が「さき竹とは、竹をわれは、せなか合になるをいふなり」として以来それを踏襲しているかのようである。⁽³⁹⁾ 筆者は、「劈き竹」への置き換えが適切と考えている。劈き竹は、今日言うところの「裂けた竹」と実態が重なる。

かつて窪田空穂は「さき竹」は、「裂いた竹で」と読解したが、注釈では、従前の解釈から抜け出すことがなかった。⁽⁴⁰⁾

歌作者は、「辟」字を用いているのである。毛利正守は、集中には「筆録者の文字に対する興味または文字使用に対する意気込みが意識的な文字を選択させて、そこに趣向をこらしているといった歌を見出すことができる」とし、「意識的な文字使用」に留意すべきと説いた。⁽⁴¹⁾ 魅力的な論考である。原文には、「吾」「何処」「行」「今」「思」「悔」と意識的な文字選択が認められる。「辟竹」も、やはり意識的とできよう。辟竹はたとえ劈竹に置き換えができたとしても、「割竹」へは無理ではないか。不適切に文字置換された歌を基とした口語訳は、いかに妙訳であったとしても作者の真意を伝えるものとはならない。

イ。「辟竹之」の実景から

「さき竹」は、どのような竹を指すのであろうか。万葉集に登場する竹は真竹（マダケ）や淡竹（ハチク）が定説とされている。⁽⁴²⁾

真竹は、ニガダケ（苦竹）とも呼ばれ、稈は高さ 20 m、径約 10cm に達し、稈面は濃緑色で節に隆起した二環のあるのが特徴とされる。⁽⁴³⁾ 一方、淡竹は、稈や径や節の特徴は真竹と同じであるが、稈面は帯白色または灰緑色である。古く中国から渡来し、稈が強く特に縦割がきくので、茶せんや提灯の骨の材料にされる。⁽⁴⁴⁾ なお、孟宗竹は元文元年（1736）に薩摩藩の島津吉貴が中国から導入したものとされている。⁽⁴⁵⁾

かかる真竹や淡竹が奈良時代に存在していたことを示唆する万葉資料がある。「有由縁并せて雑歌」（由縁ある雑歌）の一つの題詞に「昔老翁あり、号を竹取の翁といふ。この翁季春の月に、丘に登り遠く望す。忽ちに羹を煮る九箇の女子に値ひぬ。…（略）…」（巻 16・3791）とある。ここに竹を切るのを職業とする老翁が登場する。後に成立した竹取物

語との関係は不明だが、古い羽衣説話を舶載の神仙譚風に脚色した作品とみることが出来るとされている。⁽⁴⁶⁾ 竹取りを職業とする人々が生まれていた時代、かかる人々の竹の生態観察には深いものがあったであろう。

さて、「割き竹の」諸説は一樣に、切られた竹を想定している。「割った竹・割りさいた竹・割たる竹」とした場合、それは誰かが「割った竹」「割りさいた竹」で人為の加わった竹を指す(写真11)。

一方、「劈き竹の」(=裂け竹の)といった場合には、竹稈は途中で劈け、上半は傾いてはいるが根元は大地についている。原文に即せば、このような自然に劈けた竹を指すと思われる(写真12)。

「割き竹」と「劈き竹」の在り様は全く異なるのである。

先に「筑波嶺の」で、「そがひに見ゆる」の景を示した。「辟竹之 背向尔宿之久」を当てはめれば、同じように劈けた竹が斜め後ろに「寝ている」景が表れてくる。ここでも「斜めに向かい合う」や「斜め後ろ」となる見え方を示す。「そがひ」の実景がここにある。

真竹は長稈ゆえに強風や雪に弱い。一定の方向に劈けて倒れる。竹藪は手入れをしないとたちまちに荒れてしまう。強風にあおられ、積雪に撓み、たちまちに「竹が寝る」。荒れた竹藪の象徴が劈き竹なのである。かかる現実的な景の観察が基にあって、そこに後から湧き出た夫への愛情の念を重ねて生まれたのが本歌であったと思われる。

ここで、「竹が寝る」を述べておきたい。竹はランダムに寝るのではない。ある一定の方向性をもっている。ここに「そがひに寝しく」光景が現れるのである。この歌は共寝をしなかったのを悔いた歌とされている。それに即して「辟竹」の実景を見ると「くの字」に寝ている姿が見えて来る(写真13)。ロールシャッハテストの類との批判はあろうが、本歌が「寝しく」を詠んでいることからすれば、有り得ないこととは思えない。

(2)「山菅の」のそがひ

○かなし妹を いづち行かめと 山菅の そがひに寝しく 今し悔しも (巻14・3577)

【可奈思伊毛乎 伊都知由可米等 夜麻須気乃 曾我比尔宿思久 伊麻之久夜思母】

挽歌にあるもので「いとしい妻が どこへ行くものかと (山菅の) 背中合わせに寝たことが 今では残念だ」と口語訳されている。⁽⁴⁷⁾

ア、枕詞「山菅の」をめぐって

枕詞の「山菅」を問題としたい。万葉研究において「夜麻須気」(山菅)はどのように理解されているであろうか。基礎的な確認を行っておきたい。万葉植物学者の稲垣富夫によれば、ヤマスゲとは、今日の「カサスゲ」<ミノスゲ>を言うのであり、「スゲはカヤツリグサ科スゲ属の総称であって特定のものではない」とする。⁽⁴⁸⁾ 万葉学者の多田一臣も「山菅は、菅の一種。カヤツリグサ科の多年草」とする。

● 仔細な植物図鑑によればスゲ属は、クロカワズスゲからテキリスゲまで実に119種もある。そこには「ヤマスゲ」と特定されるものはない。⁽⁴⁹⁾別の植物辞典にはヤマスゲは「山地に生える菅の類」とある。⁽⁵⁰⁾また、現在、富山県高岡市福岡町で菅笠問屋を営みスゲ栽培に詳しい岸野有三氏にお尋ねしたところ、「それは山地に植えているから、そう言うのであろう」とされた。「山菅」とは、すなわちカヤツリグサ科スゲ属の生育地の特色による慣習的呼称であると思われる。⁽⁵¹⁾

● 今日、カヤツリグサ科スゲ属による菅は、菅笠の材料として生産されている。その伝統が万葉時代からであることは次の歌から知ることができる。

○ おしてる 難波の菅の ねもころに 君が聞こして 年深く ……(巻4・619)

○ おしてる 難波菅笠 置き古し 後は誰が着む 笠ならなくに (巻11・2819)

● 「山菅の」スゲは菅笠の材料としてのスゲを指すとしてよいだろう。では枕詞「山菅」に対する理解はどのようであろうか（なかにはユリ科を想定したものがあるかもしれないが、筆者には識別できない）。

① 「その細長い葉がそれぞれ別の方向に伸びているのでソガヒにかけた」⁽⁵²⁾

② 「類音の繰返しと、山菅の葉の出かたが放射状で互いに背を向ける形である意とでかけた」⁽⁵³⁾

③ 「放射状に勝手な方向に伸びているのでかけた」⁽⁵⁴⁾

④ 「穂先の乱れる意から背向にかかる」⁽⁵⁵⁾

⑤ 「「山菅」の葉の出方が互いに背を向けているからともいう」⁽⁵⁶⁾

● このように、山菅の葉がランダム（乱れている）な状態を示す解説が主である。

イ. 「山菅の」の実景から

● 筆者はこの歌を理解する手法として、難語「そがひ」をひとまず（括弧）で括ってから考えてみることにする。すると「山菅の（そがひに）寝しく」となる。「山菅の寝しく」というのは、「山菅が寝る」ことであり「山菅が倒れる」状態を示す。

● かかる「山菅が寝る」状態の実景観察を行った。今日でも菅笠づくりの伝統を保持している富山県高岡市福岡町の重要無形民俗文化財「越中福岡の菅笠製作技術」（2009年3月指定）での菅栽培が参考となる。当地の菅笠生産は江戸中期には知られており、明治時代には菅笠問屋は60戸に達し、年間300万枚を生産し全盛を誇ったとされる。かかる菅笠の材料となる菅の水田（菅田）は、かつて小矢部川左岸の西明寺や土屋、赤丸、上向田などの山麓の水田で盛んであったが、今日では主に上向田地区などの谷奥で細々と営まれているに過ぎない。

● 菅栽培の詳細が日和祐樹によって報告されている。⁽⁵⁷⁾それによれば、9月中旬～11月上旬に苗を約45度の斜め植えをする。植え付けた苗は12月頃に枯れ、根元から新芽が出

始める頃に雪積期をむかえる。「五月下旬から七月にかけて草丈伸長期を迎え、葉数も増えてくる。そして七月中旬には長いものは二メートルにも伸び、刈取り適期を迎える」。刈り取られた菅は、天日で乾かされ菅笠の材料となる。このようなサイクルで管理された菅田は、めったに倒れることは無い。「菅は一度植えると三、四年はその古株から出る新芽を間引いて育てる」、「それ以上放置すると良質の菅にはならない」、「増殖を放置しておくと葉身幅が狭く、草丈の短いものにしか育たない」とされている。その実際を見たいと思っていたところ、幸運にも福岡町上向田の宮崎隆氏（1930年生まれ）に、所有する菅田を案内していただいた（2010年12月21日）。そこには10月に植えられた苗（写真14）と、古株から新芽が出ている管理された菅田（写真15）、数年間放置された菅田（写真16・矢印）の3種類が展開していた。谷奥の菅田（水田）には豊富な水が流れ込んでいた。そこは山に育つ菅＝「山菅」に相応しい場所であった（写真17）。

目を引いたのは放置された菅田である。谷から吹きあげる風によって山側に倒れた菅の塊があった。菅が寝る様態は、何年間も管理をしないで放置された菅田に具現する。毎年管理されて7月に刈り取られた田では、葉そのものが無いので、このような（葉が寝る）様相が表出するはずもない。ここにおいて、「山菅」が「寝る」のは、それを長年放置した結果と知った。

「そがひ」を（括弧）から放ってみよう。「山菅のそがひに寝しく」という実景は、乱れ倒れた中にもある一定の秩序をもって表れている（写真18）。これまで「勝手な方向に伸びている」などとされてきたが、実際には一定の方向性と、ほどほどの塊を成して寝ているのである。

それらは、決して「背中合わせ」を示していない。個別の塊の関係性で見れば「斜めに向かい合う」や「斜め後ろ」となる見え方を成している。「山菅のそがひに寝しく」の実景がここに現れている。その様子は、あたかも背中を丸めて寝ている人々を連想させる（写真19）。万葉人がかかる山菅の様相に「寝しく」を感じとったとしても不思議ではないと思われる。

（3）「そがひ」の「背中合わせ」説

「筑波嶺（寝）に」（巻14・3391）、「さき竹のそがひに寝しく」（巻7・1412）、「山菅のそがひに寝しく」（巻14・3577）は、いずれも「寝」を歌っている。これまで1412・3577の「そがひ」は「背中合わせ」と解されてきた。⁽⁵⁸⁾

このことは共寝を前提としている。現代的な男女の寝床が想起される場所である。しかし本稿で述べたように「背中合わせ」そのものが成立しない可能性がある。

ここに奈良時代の堅穴住居での家族の寝所配置がうかがえる山上憶良の有名な歌があ

る。【貧窮問答の歌一首】
○風交じり 雨降る夜の 雨交じり 雪降る夜は すべてもなく 寒くしあれば …(中略)
…伏せ盧の 曲げ盧の内に 直土に 藁解き敷きて 父母は 枕の方に 妻子どもは足の
方に 囲み居て 憂へ吟ひ かまどには 火気吹き立てず 甑には 蜘蛛の巣かきて 飯
炊く ことも忘れて …(後略) …(巻5・892)「この歌の歌の文章」(『現代語訳』)
口語訳は、「伏せ盧の 曲げ盧の内に 地べたに 藁を解き敷き 父母は 上座の方に
妻や子は 下手の方に 身を寄せ合って ぼやいてうめき」とされている。⁽⁵⁹⁾ 妻子は貧
窮者(山上憶良による庶民代弁の形式による)の下手の方(歌詞では「足の方に」)に寝
ているのである。貧窮者を基準として斜め後方に寝ている構図が成立する。「そがひ」の
実体がここにもあるようだ。貧窮者の「足の方」(斜め後方)に、体を丸めて身を寄せ合っ
て寝る妻子の姿を想起することができる。

この歌は、庶民の生活の実態を訴えたものとされている。このような就寝形態は当時、
一般的であったことを示唆する。「そがひに寝しく」は、かかる日常的な就寝形態の中の
一齣であったようだ。このように見ると、「そがひに寝しく」は、「普通だれもがしている
寝方」を表す言葉となる。先に「辟竹の(そがひに)寝しく」や「山菅の(そがひに)寝
しく」は放置された竹藪や菅田を象徴するとした。ゆえに、枕詞「さき竹の」「山菅の」は“日
頃構っていない”ことを含意すると思われる。この辺りの夫婦関係は現代にも通じるもの
があるようだ。伊勢歌集の「いとし妻が どこへ行くもの
かど、気にもとめず(山菅の如く)いつも通り斜め後に離れて寝ていたことが、今では悔
やまれる」(もっと大切にし、共寝しておればと悔やまれるのである)となろう。日頃空
気のような存在であった妻を失って初めて知った夫の愛情を詠んだものと言えよう。⁽⁶⁰⁾

IV. おわりに

ここに「筑波嶺に」(巻14・3391)、「さき竹の」(巻7・1412)、「山菅の」(巻14・
3577)の3首の「そがひ」について私考を呈した。この3首を選んだのは、いずれも「寝」
をテーマとしており、奈良時代の人々の「寝」に対する共通の思想を具有しているとみた
からである。まず、筑波寝の形容を筑波山と足尾山との山容に認め、互いの「そがひ」関
係を実景で確認した。ついで、「背中合わせ」説の根拠となってきた「さき竹の」と「山
菅の」の歌について、真竹や菅の生態からその説は成立しないとした。3首の「そがひ」は、
実地の景から「斜めに向かい合う」や「斜め後ろ」と解釈できる。
本稿での「そがひ」論は、これまでの国文学、万葉学の常識を越脱するものである。荒

唐無稽として無視する向きもあると思われる。けだし考古学を専攻する筆者がいくらか万葉学と接して感じるのは、これまでの研究において歌作環境への言及がほとんど成されていないことである。实景と離れた論は空しい。ここでは努めて実地を踏まえてのアプローチを試み、そこから導きだされた解釈を呈したつもりである。すでに解決済みの課題や基本的文献の遺漏もあろう。また、筆者の誤解や想像による飛躍もあろう。これらについて識者のご批正を賜れば幸いである。

註

- (1) 溝上貴信「萬葉集「そがひ」に関する一考察」『山口国文』13号 山口大学人文学部国語国文学会 1990年／1～11頁
- (2) 山崎良幸『万葉歌人の研究—文芸の創造とその表現—』風間書房 1980年再版／259～260頁
- (3) 小野寛『大伴家持研究』風間書院 1980年／466～470頁
- (4) 小野寛「万葉集「ことば」考(251)」『コスモス』52—11 コスモス短歌会 2004年／11頁
- (5) 吉井巖「万葉集「そがひに」試見」『帝塚山学院大学日本文学研究』12 帝塚山学院大学日本文学会 1981年／39頁
- (6) 筆者の地域学的試みとして従来説の再検討を行ったことがある(拙稿「越中時代の伴家持の歌とその環境」『第18回春日井シンポジウム2010年「万葉集」に歴史読む』春日井市・春日井市教育委員会・春日井シンポジウム実行委員会 2010年／1～15頁)。
- (7) 久松潜一監修『契沖全集第六卷 萬葉代匠記六』岩波書店 1975年／40頁
- (8) 渡部和雄「筑波嶺に背向に見ゆる葦穂山」『国語国文研究』54 北海道大学国語国文学会 1975年／1～13頁
- (9) 窪田空穂『萬葉集評釋』第九卷 東京堂出版 1985年新訂再版／52頁
- (10) 佐竹昭広、山田英雄、工藤力男、大谷雅夫、山崎福之校注『新日本文学大系3 萬葉集三』岩波書店 2002年／323頁
- (11) 馬田義雄「「そがひにみゆる」攷」『和歌山大学学芸学部紀要(人文科学)』10 和歌山大学学芸学部 1960年／56頁
- (12) 青木生子、井出至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎校注『新潮日本古典集成 万葉集四』新潮社 1982年／101頁
- (13) 土屋文明『萬葉集私注七』筑摩書房 1970年／307頁
- (14) 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集7 萬葉集②』小学館 2006年／470頁
- (15) 小野寛「「そがひに」考」『論集上代文学』第9冊 笠間書院 1979年／85～117頁。
- (16) 山田孝雄は「「ソガヒに見ゆ」とは後方に在ることをいへるにして必ずしも實地に見るといふ意にあらず」(『萬葉集講義 卷第三』寶文館 1943年／518頁) とするが、ここでは変幻自在な解釈が可能となる主観論には立ち入らない。
- (17) 渡部和雄「筑波嶺に背向に見ゆる葦穂山」『国語国文研究』54 北海道大学国語国文学会 1975年／8～11頁
- (18) かつて生田耕一が、「そがひ」を「すちかへ」と解いた(生田耕一『萬葉集難語何訓攷』春陽堂 1933年／21～26頁)。その実体がここに存る。生田説に依拠して今日、「斜め後方」

- とする説があるのは言うまでもない。
- (19) 主要遺跡は、茨城県史編纂会『茨城県史料＝考古資料編 奈良・平安時代』茨城県 1995年／巻末資料「奈良・平安時代主要遺跡分布図」によった。
- (20) 阿部義平編『国立歴史民俗博物館研究報告第129集 茨城県常総市国生本屋敷遺跡発掘調査報告書』(財)歴史民俗博物館振興会 2006年／巻頭図版I-2
- (21) 河野辰男、春日綱男、玉井輝男、滝坂滋、赤井博之、酒井弘志『下野野方台遺跡』・『同(写真図版編)』下栗野方台遺跡発掘調査会・千代村教育委員会 1993年
- (22) 川井正一「74野方台遺跡」『茨城県史料＝考古資料編 奈良・平安時代』茨城県 1995年／169～171頁
- (23) 松村明監修『大辞泉』小学館 1995年／1555頁
- (24) 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集7 萬葉集②』小学館 2006年／276頁
- (25) 古橋信孝『万葉歌の成立』講談社学術文庫 1993年／161～181頁
- (26) 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集7 萬葉集②』小学館 2006年／277頁頭注
- (27) 多田一臣『万葉集全解3』筑摩書房 2009年／173頁脚注
- (28) 武田祐吉『増訂 萬葉集全註釋』角川書店 1956年／524頁
- (29) 福井久藏『枕詞の研究と釋義』不二書房 1927年／207頁
- (30) 窪田空穂『萬葉集評釋』第五卷 東京堂出版 1984年新訂再版／275頁
- (31) 山崎良幸『万葉歌人の研究』風間書房 1980年／257頁
- (32) 溝上貴信「萬葉集「そがひ」に関する一考察」『山口国文』13号 山口大学人文学部国語国文学会 1990年／9頁
- (33) 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集7 萬葉集②』小学館 2006年／208頁頭注
- (34) 松村明監修『大辞泉』小学館 1995年／2061頁
- (35) 山田俊雄ほか編『角川大字源』角川書店 1992年／1732頁
- (36) 白川静『字通』平凡社 1997年／1412頁ほか
- (37) 諸橋轍次『大漢和辭典 卷十』大修館書店 1980年版／1077頁
- (38) 山田俊雄ほか編『角川大字源』角川書店 1992年／210頁
- (39) 久松潜一監修『契沖全集第三卷 萬葉代匠記三』岩波書店 1974年／550頁
- (40) 窪田空穂『萬葉集評釋』第五卷 東京堂出版 1984年新訂再版／275頁
- (41) 毛利正守「一三番「高山波雲根火雄男志」の解釈をめぐって」『美夫君志』第34号 美夫君志會 1987年／37～47頁
- (42) 大貫茂『萬葉植物事典』クレオ 2005年／60頁
- (43) 鈴木貞雄「マダケ」『日本大百科全書22』小学館 1988年／7頁
- (44) 鈴木貞雄「ハチク」『日本大百科全書18』小学館 1987年／780頁
- (45) 鈴木貞雄「モウソウチク」『日本大百科全書22』小学館 1988年／823頁
- (46) 室伏信助訳注『新版 竹取物語』(角川ソフィア文庫) 角川学芸出版 2010年／164頁
- (47) 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集8 萬葉集③』小学館 1999年／518頁
- (48) 稲垣富夫『草本万葉百首』右文書院 1985年／157頁
- (49) 北村四郎・村田源・小山鐵夫『原色日本植物図鑑(下)』保育社 1964年／254～301頁
- (50) 木村陽二郎『図説草木名彙辞典』柏書房 1991年／350頁
- (51) ヤマスゲを「ユリ科ジャノヒゲ属のジャノヒゲ」とする説がある。牧野富太郎博士が『植物

ママ「記」カ
誌』の中で、「麦門冬はリュウノヒゲ一名ジャノヒゲ、古名ヤマスゲの専用名である」と記しているという（大貫茂『萬葉植物事典』クレオ 2005年／111頁）。ただし、古名が万葉時代からのものであるかの検証が必要であろう。地域によって古い時代の植物名の錯誤借称例は多い。ユリ科の“やぶらん”に比定する説もある（小清水卓二『萬葉植物 寫真と解説』1942年 三省堂／159頁）。筆者は、万葉時代の生活材として人々とどのように関わっていたかが重要と考える。この点、万葉集巻4・619、巻11・2819は菅笠の素材としてのスゲを詠んでいる。ユリ科が生活材として用いられている事例を管見の限り知らないが、菅笠の素材となっているのはカヤツリグサ科スゲ属のカサスゲとキンキカサスゲである（大貫茂『萬葉植物事典』クレオ 2005年／57頁）。ヤマスゲという名称自体、ヤマ＋スゲの合成語として成っていると思われる。従って、ここではユリ科の植物説はとらない。

- (52) 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集 8 萬葉集③』小学館 1999年／518頁
- (53) 青木生子、井出至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎校注『新潮日本古典集成 萬葉集四』新潮社 1982年／152頁
- (54) 小島憲之、木下正俊、佐竹昭広校注・訳『日本古典文学全集 萬葉集三』小学館 1973年／505頁
- (55) 高木市之助、五味智英、大野晋『日本古典文学大系 6 萬葉集三』岩波書店 1985年／457頁
- (56) 多田一臣『萬葉集全解 5』筑摩書房 2009年／425頁
- (57) 日和祐樹『福岡町の菅と菅笠』福岡町菅振興対策協議会教育部会 2002年／16～17頁
- (58) 溝上貫信「萬葉集「そがひ」に関する一考察」『山口国文』13号 山口大学人文学部国語国文学会 1990年／1～11頁
- (59) 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集 7 萬葉集②』小学館 2006年／71頁
- (60) 中村宗彦は、巻7・1412と巻14・3577の「両歌は、「いづち行かめ」と安心して、共寝しなかったこと、その機会を失したことを悔やんでいると見るべきで、「背を向けた」ことへの悔恨ではなかろう。「いづち行かめ」には無事の毎日に狎れ、その人に頼り切っていた語感がある」と説く（中村宗彦〈「越中立山縁起」・「そがひに見ゆる」考〉『天理大学学报』160 天理大学学術研究会 1989年／15～16頁）。訳意に関して筆者の理解に近い。